

# 一八六六年恐慌(完)

三宅義夫

## 七

イングランド銀行のバンク・レートは、きわめて低位であった一八六二年ののち、一八六三年の終りごろから、世界各地からの綿花買付——これは cash で払わねばならなかった——と鉄道などへの活潑な海外投資とから金属流出気味となり、十二月三日には八パーセントに引上げられ、その後外国からの資本流入があったが、一八六四年は六パーセント以下には下がらなかった。そして既述のように一八六四年の五月五日から二週間、また九月八日から十一月十日までの間の二度にわたって九パーセントの高さに引上げられた。この一八六四年秋は南北戦争の和乎の気配と大量の綿花輸入とから綿花価格の急落がおきたときであって、エンゲルスが同年十一月二日付の手紙で「商業恐慌」とし、「こうしたものが現在もうこれで止まって正常に成熟しないのは残念なことだ」と記していた事態であった。「一八六四年の秋はとくに危険であった」(Walter Bagehot; Lombard Street, 1873, ed. by Johnstone, 1908, p. 184, 宇野訳、一七六ページ)。このあと翌一八六五年春に南部敗北が決定的となるにつれふたたび綿花価格の急落となって「綿花パニック」、「綿花恐慌」が生じたが——一八六五年四月十二日付エンゲルスの手紙——バンク・レートはさきの一八六四年九月—十一月の九パーセントから同年末までに八、七、六パーセントと下がり、一八六五年に入っても

なかばまでひきつづいて下げ足を辿って、六―七月には三パーセントにまで下がった。「九パーセントが長くつづいた間に、シテイでの諸災厄が回避されたばかりでなく、支配的であった諸圧迫がとり除かれていった。木綿業者および綿花投機者は南部の予期された敗北を織り込み (discount) はじめていった」 (Clapham; Bank of England, vol. II, p. 260)。そして南北戦争終了後もしばらくの間アメリカからの商品、資本にたいする需要は諸事情からやってくる。「一八六四年の秋にはじまった事業の弛緩 (slackening) がつづいた」 (Clapham; Economic History of Modern Britain, vol. II, p. 374-5)。右の一八六五年なかばまでバンク・レートが一路下げ足を辿ったのはこのことの反映であった。

イギリスの貿易量は一八六一―二年には対米貿易の減退から低下したが、その後の南北戦争の間、「英米貿易は全体としては改善されなかったけれども、一八六〇年の対仏協約およびそれに後続したものに助けられて、イギリスはその貿易カーブの急勾配の上向コースをとり戻すに十分なはけ口ならば供給源を他のところで見出していった」 (Clapham; Economic History, vol. II, p. 373)。綿業および絹——絹はフランスの競争に直面して不振をつづけた——を別とすると、「一八六三年はイギリスの製造業者にとってきわめて良好な年であったし、また商人や金融業者や会社設立者にとってはとくにかかる年であった。工業ではランカシアおよびグラスゴーが損失したものの大部分をヨークシアおよびダンデールが利得した」 (ibid. p. 373)。そしてとかくするうちに、上記のように一八六三年の終りごろから金属流出気味となってバンク・レートがひき締ってゆき、一八六四年には高位のレートがつづき、春と秋二度にわたって九パーセントを現出したのであるが、そのあと「一八六四年の秋にはじまった事業の弛緩」が一八六五年なかばまでつづいていったわけである

(1) 「アイルランドの唯一の大工業たる亜麻布製造業は……一八六一―一八六六年の綿花騰貴以来のその拡張にもかかわらず、人口

中の相対的にとるにたりない部分しか就業させない」(『資本論』 Bd. I, S. 743, 長谷部訳、青木版一〇八一ページ、傍点—三宅)。「ウェスト・ライディングの紡毛糸ならびに梳毛糸工業と北アイルランドの亜麻布工業とは綿業の転落から利益をえた。：

一八六一年から一八六四年の間に外国羊毛の輸入は一四七百万封度から二〇六百万封度に増加し、羊毛糸の輸出は二七・五百万封度からほとんど四〇百万封度に増加し、紡毛製品および梳毛製品の輸出は一六四百万ヤードから二四二百万ヤードに増加した。……一八五九年にはアイルランドに五六〇、六四二の紡錘を動かす八二の亜麻紡績工場があったが、一八六八年には八四一、八六七の紡錘を動かす九〇の工場があった。連合王国の亜麻工業の産出高は、一八五—六一年の時期と一八六二—六八年の時期とを比較すると、六〇パーセントの増加を示した。スコットランドでは亜麻、大麻、ジュートを織る織機数は綿花飢饉のあいだに倍になった」(Henderson; op. cit. p. 9—10)。

だが一八六五年の九月に入ると、アメリカからの需要が入ってき、これを契機として景気は大きく上向いてきた。

「一八六五—六六年における事業の異常な拡張 (extraordinary expansion)」(Clapham; Bank of England, vol. I, p. 263)。この九月からの活況は年を越してつづき、「一八六六年のはじめの四カ月間のイギリスの輸出価額は、一八六五年の同月間を三〇パーセントこえた。物価水準にはさした変化はなかったので、これは船積みされたじっさいの商品の増加であった。この貿易ブームに伴って、よりいっそうの会社設立や、またかかる時期によく生じるあらゆる樂觀的なもくろみや疑わしい金融が生じた」(ibid. p. 263)。イングランド銀行はすでに「用心深く」一八六五年の七月末から〇・五パーセント幅でレートの上上げをはじめていたが、同年十月からはその幅を一パーセントとし、十月—十二月は六、七パーセントの高さを維持した。翌一八六六年一月四日から二月二十二日の間は八パーセントとなった、——「暗黒の年となってゆくべき凶兆的スタート」(ibid. p. 263)。そしてその後バンク・レートは二月二十二日七パーセント、三月十五日六パーセントとやや下げたが、五月に入って五月三日七パーセント、八日八パーセントと引上げられた。十日(木曜日)にはついにオーバレンド・ガーニー商會が破産し、翌十一日はシティは「暗黒の金曜日」(Black

Friday)」(ibid. p. 263) となった。バンク・レートは十一日九パーセント、そして同夕刻一八四四年のイングランド銀行条例の停止が決定され、翌十二日バンク・レートは一〇パーセントという頂上まで引上げられた。この一〇パーセントはその後約三カ月間、同年八月十六日に条例停止が解除されるまでつづいた——「シティの鎮静化が緩慢だったので、五月二十四日には一理事から一一パーセントへの引上げ動議がじっさいになされた。だがこれは否決された」(ibid. p. 267) ——。

一八六六年五月十七日付マルクスからエンゲルスへの手紙。「僕には現在の恐慌は、たんに早くやってきた金融上の特殊恐慌(bloß verfrühte finanzielle Sonderkrise)のように思われる。この恐慌は、合衆国での事態が悪くなる(faul)ばあいのみ(「向う側の合衆国で景気の破綻が生じたばあいにのみ、という意味であろうか」、重大なもの(wichtig)となりうるのだが、それにはもう時日が間に合わないだろう。君たち木綿諸公はどんな影響を受けていますか? また綿花価格の低落はどんな影響を及ぼしていますか?」

一八六六年五月二十五日付エンゲルスからマルクスへの手紙。「パニックはいずれにしてもきわめてあまり早く来すぎた。そして、さもなくば一八六七年か一八六八年にやってきたであろうところのみごとなしっかりした恐慌(eine gute solide Krisis)をおそらくはだめにしてしまいうるようだ。たまたまこれと時を同じくして綿花の強い下落がやってこなかったとすれば、当地のわれわれにはほとんどこれは影響を及ぼさなかっただろう。有限責任会社(limited liability)や金融迷惑(financing-Swindeleien)の破綻はじっさいもうずっと前から予想されていたことであったが、われわれの取引はほとんどまったくこれに関係がなかった。だが、これと同時にやってきた綿花で大きな損失のため、事態は当地にとって重大なもの(ernsthaft)となりそうだ。当地およびリパプールのきわ

めて多くの商社が、ボンベイ等々の支店を通じてこの損失のなかにまき込まれているのであって、そこに時を同じくして貨幣パニックと一〇パーセントの割引率とがやってきたのだから、たくさんの綿花を持っている連中にとって事態はきわめて重大なもの(ernsthaft)となりうるのだ。いずれにしても、当地ではいっさいはまだしばらく終りにならない。」

一八六六年六月七日付マルクスからエンゲルスへの手紙。「君もコンソリディテッド・バンク(Consolidated Bank)の被害を受けたのじゃないだろうか? ドクター・ローデ(Rode)が一昨日当地にやってきて、ドロンケ(Dronke)がバーネット(Barnett)の破産(crash)のために大きな損失を受けたことをきわめて意地悪く説明していった。」

一八六六年六月十一日付エンゲルスからマルクスへの手紙。「われわれはいまのところ銀行破産の騒ぎ(Bankfaillitererei)にたいしてはまだなんの損害も受けずにすんでいる。ドロ「ンケ」は僕に自分でこういつていた、自分はバーネットのところに少々置いているが、しかしそれよりも銀行業者をとり替える必要からそこに三、〇〇〇ポンド預けていたのだと。——それに彼は株主でもあったので、そのことから損失を受けている。アイヒホフ(Eichhoff)も、自分の銀行業者が破産し一六ポンドで窮地に陥いる、という榮譽を受けた。だがこれはまだ大したことではないが、彼が満期になった手形の支払ができないばあいには、彼は立往生してしまうことになるだろう。」

右でいっている「コンソリディテッド・バンク」というのは English Joint-Stock Bank, Imperial Mercantile Credit Company, European Bank, Bank of London, Agra and Masterman's などともいふ、バンク中に支払停止となった銀行であった。コンソリディテッド・バンクのばあいには支払停止は「ただ一時的」でその後再開した。同行の支払停止は「資産の欠乏によってひきおこされたものではなく、同行にたいする異常な要求を賄

うために、その資産を通貨（イングランド銀行券）にかえることができなかったことからひきおこされたものであった（J. W. Gilbart, *History, Principles and Practice of Banking*, vol. II, p. 320. 名 Macleod, *Theory and Practice of Banking*, 2ed. vol. II, p. 159）。また「バーネット」といつているのはロンドンの古い銀行業者 Barnett, Hoares & Co. のことであろうか。もしそうだとすると、同行は一八八四年まで存続していたから、ここで crash と書かれているが、このとき支払停止になったがその後再開してつぶれなかったのであう。

マルクスはまた『資本論』第一巻のなかでこの一八六六年五月のパニックについて——既述のように当時第一巻の印刷用原稿を書いていた——つぎのように述べている。「一八五七年には、いつのときも産業循環がそれをもって終る大恐慌の一つがやってきた。つぎの期限は一八六六年に満期となった。本来の工場地帯では、すでに綿花飢饉——これは多額の資本を目ごろの投資部面から貨幣市場の大中心地に追いやった——によって割引されていたので、恐慌はこのたびは主として金融的性格（*ein vorwiegend finanzielle Charakter*）をとっていた。一八六六年五月におけるその勃発の信号となったのはロンドンのある大銀行（*Risenbank*）の倒産であって、それにつづいて無数の金融的泡沫会社（*finanzielle Schwindelgesellschaften*）が倒壊した。破局に陥ったロンドンの大事業部門の一つは鉄船建造業であった。大造船所はすでに眩惑時代に際限なく過剰生産をやっていたばかりでなく、そのうえ、信用の泉がいつも豊富に湧きつづけるであろうという思惑からばく大な引渡契約をしていた。どころへいまおそるべき反動（*Reaktion*）がやってきたのであって、この反動はロンドンの他の諸産業でも現在、すなわち一八六七年三月末まで（*bis zum Ende*）（*Bd. I, S. 704—5*, 長谷部訳、青木版一〇二九—三〇ページ）。

イギリスでは一八六二年に有限責任法（*Law of limited liability*）——株式会社法——が制定されたが、これは

一八六六年恐慌にいたる過程において企業投資、会社設立の氣運を大いに助成するものとして作用した（一八六二年の法律はすでに一八五六年に制定されていた同法を強化、拡張したものにすぎなかったようであるが、——Henderson, op. cit. p. 21, footnote 3）。「すでに一八六四年三月に、有限責任のプリンスブルのもとに形成された多数の新会社は大きな不安を与えていた。このときまでに二六三の会社が七八、一三五、〇〇〇ポンドの名目資本金をもって形成され、そのうち二七が銀行であり、一五が割引会社であった。一八六四年八月には、これらの新金融会社の長期引受手形が市場を圧迫しはじめ、そして一八六六年の恐慌の基礎が置かれた」（MacLeod, *ibid.* p. 156-7）。エンゲルスがさきの五月二十五日付の手紙で「有限責任会社や金融恐慌の破綻はじっさいもうずっと前から予想されていたことであった」と記していたのは、オーバレンド・ガーニー商会にたいする疑惑とともに——なお同商会も一八六五年夏に有限責任会社に改組し、Overend, Gurney & Co. Ltd. となっていた——、かかる事情を指していたのであらう。とともに、一八六六年の一月ごろからこれらの企業、金融会社の破産が現われはじめていた。前記のようにイングランド銀行は一八六六年一月にバンク・レートを七パーセントから八パーセントに上げたが、「一八六六年二月は種々の有価証券の保有者間ではげしい動揺が生じた時期であった。鉄道契約に携わっていたいくつかの大商會が支払を停止した。数カ月前までは熱烈に買いあさられていた投資物件が市場性のないものとなり、人々は、有限責任会社マニアのときにはたやすく『その証券が売れた（floated）』事業を受けつけないようになった。疑惑がいたるところで広がり、あらゆる種類の有価証券が一度に市場に投げ出された。そして最後に、一八六二年の有限責任法のもとに形成された諸会社のうち大きなパーセンテージのものが日々解散してゆき、裁判所の正常の事務を大きく妨げるまでになった。／＼だが、鋭い騒ぎをひきおこしたのは Joint-Stock Discount Company の破綻であって、これにつづいて四月に三五〇万

ボンドの負債をもつリバプールの *Barned's Bank* の支払停止がおきた。驚愕は一般的なパニックの方に高まつてゐた」(Gilbart; *ibid.*, p. 308)。そして事態は、五月十日のオーバーレンド・ガーニー商会の破産——マルクスが右の『資本論』のなかで「ロンドンのある大銀行の倒産」といつているもの——にまで発展していったわけである。

マルクスはさきの一八六六年五月十七日付の手紙では「僕には現在の恐慌は、たんに早くやってきた金融上の特殊恐慌 (*finanzielle Sonderkrise*) のように思われる」といつているが、『資本論』の方では一八六六年の事態を——そこでいつているようにこれを書いたのは「一八六七年三月末」ごろ——一八五七年恐慌と並ぶものとし、「恐慌はこのたびは主として金融的性格を帯びていた」と記している。マルクスは同じく貨幣恐慌といつても、「あらゆる一般的な生産および商業恐慌の特殊的局面 (*besondere Phase*) として規定されるような貨幣恐慌」と「やはり貨幣恐慌と呼ばれているが独立的に (*selbständig*) 生じるような、したがって産業および商業にはただ反応的にのみ (*nur* (*rückschlagend*) 作用するような、特殊な種類の恐慌 (*die spezielle Sorte der Krise*)」とは区別されるべきことを注意しているが、『資本論』Bd. I, S. 143, Fußnote, 長谷部訳、青木版二七〇ページ、右の手紙と『資本論』との書き方を見ると、最初は「現在の恐慌」をこの「特殊な種類の恐慌」ではないかと見ていたが、その後これをやはり週期的恐慌の一環として把えるべきだと考えるようになったのではなからうか、と推測されないでもない。

それはともかくとしても、この一八六六年の事態は一八四七年の商業的、一八五七年の工業的にたいして、特徴として「金融的」性格をもっていた。既述のように一八六〇年代は、「イギリス木綿工業の絶頂」だった一八六〇年のち、一八六一年夏ごろからアジア、オーストラリア市場においてイギリス綿製品の供給過剰、滞貨が現われてきたが、これとともに同年四月に勃発した南北戦争の結果として綿花飢饉が生じてきた。だが金融緩慢の一八六二年のあ



と、一般の事業活動は一八六三年には大きく活況を示し、また一八六四年秋の逼迫後、一八六五年秋から、戦争終了に伴なうアメリカからの需要も入って、一八六六年春にかけて「事業の異常な拡張」が生じた。一八六六年五月のパニックはこうした昂揚を基盤として、その反動の現われであったにはちがいない。しかし、——当時の「本来の工場地帯」たるランカシアが綿花飢饉によってその発展をモディファイされていたこととともに——、右の昂揚が有限責任会社ブームによって助成されていたため、またオーバレンド・ガーニー商会の破綻が恐慌の「勃発の信号」ということになり——恐慌が進行してゆく過程における頂点的なもり上がりとしてではなく——、そしてまた恐慌がすぐれて「金融的性格」をもつことになったわけであろう。なお、以下の諸記述はたんなる参考として掲げるにすぎない、——「現在の金融パニック (Financial Panic) ……われわれはこのパニックを『金融的』と呼んだ。というのは、それがはじまったのは『金融 (financing)』の新システムのなかであり、またあたらしい諸金融会社とその結果をもっともきびしく感じているからである」(一八六六年五月十日付『タイムズ』社説 T. E. Gregory: *Select Statutes, Documents & Reports relating British Banking, 1832—1928, vol. II, p. 129—30*)。このパニックは、われわれが記憶している他のいずれよりも、信用パニック (a credit panic) である。……悪たるものは、パニックをひきおこしたほかのとき——たとえば一八四七年——のような資本の過度支出ではなかったし、また賞讃さるべき処理がなされなかったなら一八六四年に生じたかもしれないようなブリオンの流出でもなく、内部的な欠陥からきた信用の失敗であった。疑惑の念が広まったのは、われわれのブリオンの全準備がわが国の信用を支えるにはあまりにすくなくすぎたからではなかったし、またわれわれの支出がわれわれの年々の貯蓄を危険な程度に超過したからではなく、貨幣の貸手たちが貨幣を誤用し

ているのではないかと疑われたからだ。古い商会のなかでもっとも有名な商会在明らかにそれを誤用したからだ。……一八六六年のパニックは、厳密にいつて、信用パニックであり、資本パニックあるいはブリオン・パニックではなかった」(一八六六年五月十九日付『エコノミスト』, *ibid.*, p. 129—170)。なおクラバムは「恐慌の結果として生じたいくつかのことは別とすれば、この恐慌は国際的な度合がすくなかった」とし、大陸において利子率がそれほど上がらなかったことなどを挙げ、「それはあらゆる意味においてパニックであり、かつそれは純粹にブリティシなものであった」と記している(*Economic History*, vol. II, p. 375)。

マルクスはオーバレンド・ガーニー商会の破綻につづいて「無数の金融的泡沫会社が倒壊した」と記しているが、「多くの *credit* とか *finance* とかこれに類似した名称の商会在ぶれていった。五月十日から八月十日の間の破産の合計は一八〇以上に及んだ」(Clapham: *Bank of England*, vol. II, p. 270)。またエンゲルスはさきの五月二十五日付の手紙で、このパニックとたまたま「時を同じくして」綿花の強い下落がやってきたと記しているが、綿花価格の動きを見ると——ミドリリング・オルレアンス、一封度当り——、既述のように一八六五年の三、四月に暴落し、四月末一四ペンス $\frac{3}{4}$ と前年七月に比し「半分以下」に下がったが、一八六五年においてはことが底値で、年末は二一ペンス $\frac{1}{2}$ であった。そしてその後一八六六年一月末一八ペンス $\frac{3}{4}$ 、二月末一九ペンス $\frac{1}{4}$ 、三月末同じく一九ペンス $\frac{1}{4}$ と推移したが、四月末一五ペンス $\frac{3}{4}$ 、五月末一四ペンスとふたたび下がってきた。そして一八六六年のこのあとはいたい一四——一五ペンス台を辿った(Henderson: *op. cit.*, p. 123)。なおエンゲルスは一八六六年八月十日付マルクスへの手紙のなかで「……綿花が現在ふたたび下がっている」と記しているが、右のヘンダーソンの月末値で見ると六月末一四ペンス、七月末一四ペンス $\frac{1}{2}$ 、そして八月末一四ペンス、九月末一四ペンス $\frac{3}{4}$ 、というような足どりを示してい

る (ibid. p. 123)。エンゲルスはこの五月二十五日付の手紙で、貨幣パニックそのものだけではマンチェスターには影響がなかっただろうが、「これと同時にやってきた綿花での大きな損失のため、事態は当地にとって重大なものとなりそうだ」と記していたが、六月十一日付の手紙でも「われわれはいまのところ銀行破産の騒ぎにたいしてはまだなんの損害も受けずにすごしている」と記しているところから見ても、マンチェスターの綿業には大した影響は生じなかったであろう。また綿花価格の値下がりのためここで「たくさんの綿花を持っている連中」が損失を蒙り、そして金融逼迫によってその困難がたとえ強められたとしても、木綿工業はこのころはまだ過剰生産の段階に入っていなかったものであって、木綿工業にとって過剰生産恐慌が生じたのは、のちに見るように、このあとまだしばらく日時がたってからのことであった。

マルクスは『資本論』第一巻のなかで上掲のように、ランカシアなどの「本来の工場地帯ではすでに綿花飢饉によって割引されていた」のでこの一八六六年恐慌は「金融的性格」をとったとするとともに、「破局に陥いつたロンドンの大事業部門の一つは鉄船建造業であった。……この反動はロンドンの他の諸産業でも現在、すなわち一八六七年三月末までつづいている」と記している。独立的な貨幣恐慌にあって「反応的に」産業および商業に影響を及ぼさざるをえないのであるが、これらロンドンの諸産業部門を襲っているものは、そうしたたんに「反応的」なものではなく、一船的繁栄の「反動」たるものとして把えられているわけである。そうしてマルクスはここに「労働者の状態を特徴づけるために、一八六七年初頭に苦悩の中心地を訪ずれた『モーニング・スター』の一通信員の詳細な報告の一部を引用しよう」として、つぎのような記述を掲げている。——「ロンドンの東部のポプラー、ミルウォール、グリーニッジ、デットフォード、ライムハウス、およびカニング・タウン諸地区では、すくなくとも一五、〇〇〇人の

労働者ならびにその家族が非常な困窮状態に陥っているが、そのうち三、〇〇〇人以上は熟練機械工である。彼らの準備金は六カ月ないし八カ月の失業のために使いはたされている。……私は救貧院(ポプラーの)門口までつき進むのに多大の骨を折った。というのは、そこは飢えた群集に包囲されていたからである。彼らはパン券を待っていた。……人々は張出し屋根の下で敷石の粉砕に従事していた。……この一つの救貧院だけで七、〇〇〇人が救助を受けていたが、そのうち数百人は、六カ月ないし八カ月前には、この国における熟練労働の最高賃銀を稼いでいたのである。「マルクスがこれらの記述を掲げている『資本論』の箇所は、現行版では「労働者階級中の最高給部分に及ぼす恐慌の影響」という表題をとっている」。……救貧院を出て、私は町を歩き廻ったが、たいていの家はポプラーに多い平家建であった。案内者は失業委員会のメンバーであった。最初に訪ねたのは、二七週間このかた失業している鉄工の家であった」云々(Bd. I, S. 705-7, 長谷部訳、青木版二〇三〇—二ページ)。

マルクスはまたこれにつづいて「一八六六年の恐慌の後陣痛(Nachwehen)について、トリー派の一新聞からの抜き書きを示そう。ここで扱っているロンドンの東部は、章の本文で言及した鉄船建造業の所在地であるばかりでなく、つねに最低限以下に支払われているいわゆる『家内労働』の所在地でもある」として、一八六七年四月五日付『スタンダード』から(インスティトゥート版では「一八六六年四月五日付」と誤植されている)、ロンドンのイースト、エンドについて、「彼らは餓死しかけている。これは単純で怖るべき事実である。その数は四〇、〇〇〇人もある。……われわれの眼前で、この驚嘆すべき首都の一地区で、世界にいまだかつて見なかったばかりの大きな富の蓄積とすぐ隣りあわせに、四〇、〇〇〇人が助けなく飢餓に苦しんでいるのだ！」云々という記述を引用して( Bd. I, S. 707-8, 訳、一〇三三—三ページ)。

(2) ⅡⅡⅡ「章の本文と(im Text des Kapitels)言及した」といっているのは、この「一八六六年の恐慌の後陣痛について」云々というところは初版では巻末の「第一部の註への補遺」のⅡとして書かれていたからである。この初版でのこの書き出しは「一八六六年の恐慌のおおつづいて後陣痛について、内閣の(トリー派の)一新聞からの抜き書きを示そう」と書かれている。なお、一八六六年五月のバニック当時はラッセルが首班のホイッグ党内閣であったが、一八六七年はダービー首班のトリー党内閣であった。

また、「一八六六年の後半期に八〇、〇〇〇ないし九〇、〇〇〇の労働者がロンドンで失業させられていた」(Bd. I, S. 676, Fußnote 85, 長谷部訳、青木版九九三ページ)。

マルクスはまた「イギリスの被救恤者統計をちよつと表面的にでも調べてみさえすれば、その数が恐慌のたびごとに膨脹し、事業回復のたびごとに減少することがわかる」(Bd. I, S. 678, 訳、九九五―六ページ)。とし、「イングランドの公認の被救恤者の数は、一八五五年には八五一、三六九人、一八五六年には八七七、七六七人、一八六五年には九七二、四三三人をかぞえた。綿花飢饉の結果、それは一八六三年および一八六四年には、一、〇七九、三八二人および一、〇一四、九七八人に膨脹した。一八六六年の恐慌——これはロンドンをもっともひどく襲ったが——によつて、スコットランド王国よりも人口の多いこの世界市場中心地における被救恤者が、一八六六年には一八六五年にくらべて一九・五パーセント。一八六四年にくらべて二四・四パーセント増加し、一八六七年の最初のころの月には一八六六年中よりもさらに大きく増加した」と記している(Bd. I, S. 689, 訳、一〇〇九―一〇一〇ページ。初版、S. 681)。またそのさいマルクスはつぎのような注意書きを添えている。「被救恤者統計の分析にさいしては、二つの点に注意されねばならない。一方では、被救恤者の増減運動は産業循環上の週期的盛衰を反映する。他方では、公けの統計は、資本の蓄積にともない階級闘争が、したがってまた労働者たちの自己感情が發展するのに応じて、被救恤者の現実の大

きさについてますます偽瞞的となる」(Bd. I, S. 689, 訳「一〇〇九—一〇ページ」)。ここで「一八六七年の最初のころの月には (für die ersten Monate)」云々と記し、そのあととの比較をしていないが——おそらくロンドンの被救恤者数は当時このころがピークであったであろうと思われるが——、前記のようにこのあたりをマルクスが書いていたのは一八六七年三月どまりであった。また綿花飢饉による被救恤者数は、既掲のように、一八六二年——この年の数はマルクスは右で挙げていないが——の十一月、十二月ごろがピークであった。<sup>(3)</sup>

(3) マルクスは、「産業の具合がよくない時期でさえも、工場主たちによっては、過度な賃銀引下げすなわち労働者の必要生活手段の直接的盗奪によって、極端な利潤をうるために利用される。ユベントリーの絹織物業の恐慌の話である」として、『児童雇傭委員会第五回報告書、一八六六年』——これは一八六六年七月に出た——からつぎのような記述を引用している、「私が工場主ならびに労働者からえた知らせから推すと、賃銀が、外国生産者の競争その他の事情によって余儀なくされたよりもさらに大きく引下げられたことは、疑いない。織布工の大半は三〇ないし四〇パーセントの賃銀の引下げのもとで労働している。……賃銀の引下げは、需要を刺激するに必要なよりもさらに大きい。じっさい、多くの種類のリボンのばあい、賃銀が引下げられたからといって製品の価格がいくらでも引下げられたことは一度もなかった」(Bd. I, S. 477, 訳「七二九ページ」)。しかし、絹業は一八六〇年の英仏通商条約のため、綿花飢饉の間も他の繊維工業とちがって不振をつづけたのであって、ここであって「絹織物業の恐慌」というのは一八六六年恐慌につながりをもつものではなかったであらう。

## 八

つぎに、さきの一八六六年五、六月にとり交わされた手紙につぐ日付の手紙——といっても本稿でとり上げるべき内容の手紙がつぎに見当るのは左のように一八六七年一月の手紙であるが——を日付順に見てゆき、これを中心として稿を進めてゆこう。

一八六七年一月十九日付マルクンからエンゲルスへの手紙。「マンチェスターの織布工のストライキ問題またはすくなくともその争議についてだが、君が事の次第を正確に知らせてくれるとありがたいのだが。というのは、僕はまだこれを取り入れることができるのだから (da ich es noch aufnehmen kann) 『資本論』第一巻のなかに取り入れることができるという意味」。

一八六七年一月二十九日付エンゲルスからマルクスへの手紙。「工場主と労働者との関係はこうだ。インド、中国、近東、等々は非常に過剰供給となっており (überführt)、そのためキャラコは六カ月このかたほとんど売れないでいる。そこで個々の地方の工場主たちがショート・タイムを組織しようとする弱気の試みをやる。だがまとまりがつかないのでいつもだめになっている。そうこうするうちに、工場主たちはインドや中国等々へ、当地ではだれも買おうとしない商品を委託販売に出す (konsignieren)。だから過充 (glut) は増大する。これには彼らはすっかり閉口してしまい、最後に労働者にたいして五パーセントの賃銀引下げを提案する。それにはたいして労働者たちの、週に四日だけ労働するという反対提案。雇い主たちのアジテーションの拒絶。ついに、一四日以前からしだいに、そしていまこのごろでは一般的に、つぎのようになっている。すなわち織物工場およびそれに材料を供給する紡績業ではどこでも週四日というショート・タイムが行われ、そしてあるばあいには五パーセントの賃銀引下げを伴ない、あるばあいにはそれを伴ないない (und zwar teilweise mit, teilweise ohne Herabsetzung des Lohns um 5%)。労働者はかくして理論的に正しかったし、また実際のうえでも正しく行動したのだ。」

このマルクス宛のエンゲルスの手紙は、『資本論』第一巻のなかにつぎのように「取り入れ」られている。すなわち、綿花飢饉中における機械の改良について述べているところで、マルクスは一部既掲のようにつぎのような註を入

れている、——「綿花恐慌中における機械の急速な改良は、イギリスの工場主たちをして、アメリカの南北戦争が終るやたちまちのうちに世界市場をふたたび過充にする(überfüllen)ことをえせしめた。織物はすでに一八六六年のおわり六カ月中にほととど売れなくなった。そこで、中国およびインドへの委託販売(Konsignation)がはじまったのであるが、これはもちろん『過充(glut)』をさらにはなはだしくした。一八六七年はじめ、工場主たちはいつもの逃げ策に訴えて賃銀を五パーセント引下げた。労働者たちはこれに反対して、理論上まったく正当にも宣言した、——唯一の救済策はショート・タイムで、つまり週四日、労働することだ、と。長い間反抗したのち、自称産業船長たちはそうする決心をせざるをえなかった、——若干のばあいは五パーセントの賃銀引下げを伴ない、他のばあいにはそれを伴なわないで(an einigen Stellen mit, an andren ohne Lohnherabsetzung um 5%)」(Bd. I, S. 457—8, 長谷部訳、青木版七〇一ページ。初版、S. 426)

(4) なお、「一八六一年のはじめ、ランカシャーの若干の地域で機械織工のストライキがおこった。あちこちの工場主たちが五・七・五パーセントの賃銀引下げを宣告したのである。労働者は、賃銀率を維持して労働時間を短縮すべきだと主張した。この主張がいれられなかったのでストライキがおこった。一カ月後に労働者は譲歩せざるをえなかった。だがそこで彼らは両方を手に入れることになった。『労働者がついに同意した賃銀引下げのほかに、いまや多くの工場がショート・タイムで操業している』(『工場検査官報告書、一八六一年四月』)(Bd. III, S. 153—4, 長谷部訳、青木版二〇五—六ページ)。

またマルクスは「資本制的蓄積の一般的法則の倒証」のはじめのところで一八四六—一八六六年におけるイギリス資本主義発展の数字を挙げているが、そこで連合王国の輸出額を一八四六年、四九年、五六年、そして一八六〇年—三五、八四二、八一七ポンド、一八六五年—一六五、八六二、四〇二ポンド、一八六六年—一八八、九一七、五六三ポンドと掲げているところに、つぎのような註を入れている。「現在——一八六七年三月——では、インドおよび中国の



市場はブリテンの木綿工場主たちの委託販売によってすでにふたたびすっかり供給過剰になっている (ist völlig überführt)。一八六六年には綿業労働者の間で五パーセントの賃銀引下がはじまり、一八六七年には、同様な措置の結果ブレストンで二〇、〇〇〇人のストライキがはじまった」と (Bd. I, S. 686, 訳、一〇〇六ページ。初版、S. 638。初版では上の「一八六七年には」のところが「現在」と書かれている)。なおエンゲルスはその後の箇所に「(これは、すぐつづいて勃発した (gleich darauf hereinbrach) 恐慌の前奏曲 (Vorspiel) であつた)」という書き入れをしている。

さきの『資本論』第一卷 S. 457—8 の賃銀引下げとショート・タイムにかんする記述は一八六七年一月二十九日付のエンゲルスの手紙を「取り入れ」たものと見受けられるが、また右の「現在——一八六七年三月——では」云々とほぼ同じことが一八六七年三月十三日付のエンゲルスの手紙でしるされている。

一八六七年三月十三日付エンゲルスからマルクスへの手紙。「当地の取引はいぜんとして極度に停滞している (in der äußersten Stagnation)。インドと中国とは工場主たちの委託販売によって供給過剰となつているし、ストックポートでは二〇、〇〇〇人のストライキがおきており、ショート・タイムがはやつている。もしこれらの事情がすぐに変化しなければ、五月にはきわめてすばらしい過剰生産恐慌 (die schönste Krisis der Überproduktion) がくるだろう。それはただただ急進的改革運動の助けとなるばかりだ。」ストックポートとブレストンとは距離はあるが。

一八六七年六月二十二日付マルクスからエンゲルスへの手紙。「君も知つてのように、児童雇傭委員会は五カ年間活動した。一八六三年に出たその第一回報告書にもとづいて、摘発された諸部門はただちに『処置』された。トリー

内閣は今会期のはじめに……法案を提出し、これによって委員会の提案全部が——きわめて縮小された規模においてとはいえ——とり入れられることになった。処置される連中、そのなかには大金属工場主や、またことに『家内労働』の吸血鬼もいたが、彼らはいまいしげに沈黙した。いま彼らは議會に請願を出し、要求している、——あらたな調査！ 前のは党派的だ！ 彼らが計算しているのは、選挙法改正案が世間の注目をことごとく吸収していること、だから事をまったくくろくにこっそりと運んでしまうことができるだろうし、他方同時に労働組合にたいして風の吹き廻しが悪くなるだろう、ということだ。『報告書』中の最悪の箇所はまさにこの連中自身の陳述なのだ。だから彼らは、あらたな調査がけっきょく同じことになることを知っているのだが、しかしまさに『われわれブルジョアが欲すること』は——五カ年というあらたな搾取期間なのだ！ 幸いにして『インターナショナル』における僕の地位は、犬どものけっこうな期待をぶちこわしてやることができる。事はきわめて重要だ。成年男子労働者を計算に入れないでも、百五十万の人間にたいする責め苦の廃止にかかわるものだ！

マルクスは『資本論』第一巻の「労働日」の「標準労働日のための闘争。労働時間の強制的制限。一八三三——一八六四年のイギリスの工場立法」の節の末尾で、「一八六〇年以來の比較的急速な進歩」として、まだ工場立法が適用されていなかった部門にたいして一八六〇年以來適用が進められてきた事例を挙げているが、そこで『児童雇傭委員会』の第一回の報告書（一八六三年）の結果、いくつかの業種部門が工場法の適用下に置かれたことを述べ、そして「われわれは、上の委員会のその後の諸提案——それは農業、鉱山、および運輸制度を除いて、イギリスのすべての重要産業部門から『自由』を奪おうとしているものである——にあとでたち帰ろう」と記している（Bd. I, S. 309—11, 長谷部訳、青木版五〇四—六ページ。初版、S. 273—5）。

そしてその「機械と大工業」のところの「工場立法（保健および教育条項）。イギリスにおける工場立法の一般化」の節においてつぎのように記している。——『「児童雇傭委員会」はその最終報告書で「ここで『最終報告書』といっているのは、既述のように、一八六六年七月刊の第五回報告書であって、同委員会の報告書はそのあと第六回が一八六七年三月に刊行された」、百四十万人以上の児童、少年少女、および婦人——そのうち約半分は小経営および家内労働によって搾取されている——を工場法のもとに置くことを提案している。……トリー党内閣は一八六七年二月五日の開院式の詔勅のなかで、産業調査委員会「上の児童雇傭委員会のことである」の提案を『法案』に作製したと告げた」と（Bd. I, S. 517—8, 訳、七八一—二ページ。初版、S. 485）。そしてここに註を付し（初版では巻末の「第一部の註への補遺」の（内におづつ）「工場法拡張法（Factory Acts Extension Act）は一八六七年八月十一日に通過した。……一八六七年八月十七日に通過した労働時間規制法（Hours of Labour Regulation Act）は、より小さい作業場およびいわゆる家内労働を規制するものである」と記しつつ（Bd. I, S. 518, 訳、七八三ページ。初版、S. 760）。また現行版では、ついで本文においてややくり返しの、「一八六七年二月五日の開院式の詔勅のなかで、当時のトリー党内閣は、その間一八六六年にその成果を完成していた委員会の最終提案にもとづいて、より広汎な法案を発表した。——一八六七年八月十五日には工場法拡張法が、また八月二十一日には作業場規制法（Workshops' Regulation Act）が、勅裁をえた。前者は大きい事業部門を規制し、後者は小さい事業部門を規制するものである」としてこの両案について概観し、「かくして、一八六七年のこのイギリスの立法で目立つことは、一方では、資本制的搾取のやりすぎにたいするかくも異常で広汎な処置を原則的に採用する必要が支配階級の議会に強制されたことであり、他方では、議会がこの処置にじっさいに生命を吹き込むに当っての中途半端、嫌悪、および不誠実である」と述べている（Bd. I, S.

519—20, 訳、七八三—五ページ)。

また、さきの「労働日」の箇所では(初版、S. 273—5)児童雇傭委員会の提案は「農業、鉱山、および運輸制度を除く」(mit Ausnahme des Ackerbaus, der Minen und des Transportwesens)イギリスのすべての重要産業部門を規制しようとしているものと記しているが、初版でも上のS. 485のパラグラフのおわりのところで「こんどの調査委員会(これは上の「産業調査委員会」つまり児童雇傭委員会のことであつて)つぎの「鉱山特別委員会」を指しているものではないであらう」は同様に、鉱山業のあらたな規制(neue Regelung der Minenindustrie)を提案している。最後に、フォーセット(Fawcett)教授は下院に(一八六七年)、農業労働者にたいする同様な決議を提案したが、しかし内閣がイニシアチブを引受けた」と記し(初版、S. 486—7)、そこに七ページにわたる長い註を入れて、ブルー・ブック『鉱山特別委員会報告書(Report from the Select Committee on Mines)』一八六六年七月二十三日』からの抜き書きを掲げている(同上、S. 486—92)。以前に「……鉱山……を除いて」としていたのは、既述のように「労働日」の原稿を書いていたのは一八六六年二月ごろであるが、そのときには児童雇傭委員会の報告書は一八六五年刊の第四回までしか出ていなく、諸提案のなされているマルクスのいう「最終報告書」つまり第五回報告書をまだ見ないで書いていたためであらう、と推測される。それはともかくとして、現行版ではこゝは、「一八六二年の調査委員会(児童雇傭委員会は一八六二年から仕事をはじめた)は同様に、鉱山業のあらたな規制(neue Regulierung der Bergwerksindustrie)を提案した」とし(Bd. I, S. 520, 訳、七八五ページ)そこにこれまでの鉱山業に关する規制について記したのち、右初版の長い註を本文に組み入れている。そしてこのあとでつぎのように述べている、——「ともあれ、一八七二年の法律は、きわめて欠陥だらけだとはいえ、鉱山で働く児童たちの労働時間を規制

し、また鉱山の採掘業者および所有者にある程度までいわゆる災害にたいする責任を負わせる最初の法律である。

／＼農業における児童、少年少女、および婦人の就業を調査するための一八六七年の勅命委員会は若干のきわめて重要な報告書を公けにした〔この「一八六七年の勅命委員会」というのも児童雇傭委員会を指すのではないかと思われる。一八六七年三月末に公刊された報告書は、既述のように農業労働者を扱ったものであった。だがあるいは、その後あらためてまた「委員会」がつけられたのかもしれないが〕。工場立法の諸原則を変更された形で農業に適用しようとする種々の試みがなされたが、しかし今日までは、それらはすべてまったく失敗であった。しかし私がここで注意を促さねばならぬことは、右の諸原則を一般的に適用しようとする抵抗しがたい傾向があるということである」と(Bd. I, S. 528, 訳、七九六ページ)。なおエンゲルスはこの節の最後に「第四版のために」としてつぎのような書き入れを註記している、——「相互に矛盾する工場法 (Factory Acts) 工場法拡張法 (Factory Acts Extension Act) および作業場法 (Workshop Act) によってイギリスの立法がひきおこした『あらたな法律上の紛糾錯雑』がついに耐えられなくなり、かくして、工場および作業場法において一八七八年に、当該全立法の法典編集ができた。……あらゆる欠陥にもかかわらず、この法律はいまなお、一八七七年三月二十三日のスイス連邦工場法と相並んで、この対象にかんする格段最良の法律である」と(Bd. I, S. 529—30, 訳、七九七—八ページ)。

さて、以上によってみると、さきの一八六七年六月二十二日付の手紙では、児童雇傭委員会の提案にもとづいて政府は「法案」を提出したが、しかし工場主側は調査のやり直しを要求していると述べていたが、その後これらの法案は同年八月に議会を通過して成立することになったわけである。<sup>(5)(6)</sup>

(5) ところでここにちょっとおかしいことがあるのであるが、それは、さきの「労働日」の「標準労働日のための闘争。……

一八三三—一八四年のイギリスの工場立法」の節の末尾にマルクスは「第二版への註」を設け(Bd. I, S. 311, Fußnote 186a, 訳、五〇六ページ)、「私が本文の話を書いた一八六六年以来、ふたたび反動(eine Reaktion)がやっつけた」と記していることである(第二版は一八七二年から七三年にかけて分冊の形で刊行された。その「あとがき」の日付は一八七三年一月二十四日)。この註は前掲の、「われわれは、上の委員会のその後の諸提案……にあとでたち帰ろう」と述べているところ、つまりそこがこの節の本文の末尾なのであるが、そこに付してあるので、普通に読むならば、児童雇傭委員会の一八六三年の第一回報告書にもとづき工場法の適用が拡げられ、そしてその後さらに同委員会によって、適用範囲をより全面的に拡げようとする提案がなされたが、「一八六六年以来、ふたたび反動がやってきた」のだといっているように受取られるであろう。ないしはまた、その前でいっている「一八六〇年以後の『工場立法の』比較的高速な進歩」を受けているものと見て、「一八六六年以来、ふたたび」云々といっているように受取られるであろう。

しかし上に見るように、工場立法は「一八六六年以来」「反動」が生じた形跡はなく、かえって上掲のように一八六七年には立法は大幅に進んだ。そしてその十年後においても、一八七八年には「当該全立法の法典編集」ができ上がり、これは——エンゲルスの評言によれば——スイス連邦の工場法とともに「格段最良の法律」だとされている。したがって「一八六六年以来」の「反動」とは、工場立法のうえでのそれをいっているものでないことはたしかであろう。とすればこの「反動」というのはなんだろうか、なにを指しているのだろうか、ということになるが、マルクスはそのまえのところで、「一八六〇年以後の『工場立法の』比較的高速な進歩」の理由として、資本の反抗が弱まり、労働者の力が増大したことを挙げているが、それについてはさらにその前で、一八五三年に児童、未成年者、婦人に対する補足的規制がなされたが、「このとき以来、一八五〇年の工場法は、わずかの例外はあるが、それに従わされた産業部門においてすべての労働者の労働日を規制した」とし、そしてそれにもかかわらず「一八五三—一八六〇年の大工業の驚くべき発展」があったことを挙げている。それでおそらく、「一八六六年以来、ふたたび反動がやってきた」というのは、この「大工業の驚くべき発展」にたいしていっているのであろう、と考えられる。形のうえでは多少むりであるが、内容的にそう解さなくては意味がとれないことになる。本稿で一八六六年以後の工場立法について『資本論』で記していることをややくわしく見たのは、じつは、一八六七年六月二十二日付の手紙のこともあるが、そもそもこの「一八六六年以来、ふたたび反動がやってきた」という文句が不審であり、気になったからであった。

(6) マルクスは労働時間の制限について当時また、さきの「労働日」の「標準労働日のための闘争。……一八三三—一八六

四年のイギリスの工場立法」につぐつぎの節「標準労働者のための闘争。イギリスの工場立法が他国に及ぼした反作用」のところで、つぎのように述べている。——「北アメリカ合衆国では、自立的な労働者運動はいずれも、奴隷制が共和国の一部を不具にしていた間はいぜんとして麻痺状態であった。白人の労働も、黒人の労働が烙印を捺されるところでは解放されえない。だが、奴隷制の死滅から、ただちに若がえった新生命が発芽した。南北戦争の第一の果実は、……八時間運動であった。バルチモアにおける総労働者会議（一八六六年八月十六日）は宣言している、——『この国の労働を資本主義的奴隷制から解放するための現在における第一の大必須事は、アメリカ連邦のすべての州で八時間を標準労働日たらしめるべき法律の発布である。われわれは、この光栄ある成果が達成されるまで、われわれの全力をつくすことを決意した』と。それと同時に（一八六六年九月はじめ）、ジュネーヴにおける『国際労働者会議』は、ロンドンの総務委員会の提案にもとづいてつぎのように決議した、——『われわれはここに、労働日の制限を、それなくしては解放を求める他のいっさいの努力が挫折せざるをえない予備条件だと宣言する。……われわれは、八労働時間を労働日の法的限度として提案する』」（Bd. I, S. 315, 訳、五一—一二ページ）。ジュネーヴのこの大会は国際労働者協会——第一インターナショナル——の最初の年次大会であった。

一八六七年八月十五日付エンゲルスからマルクスの手紙。「……そのうえ、糸価の低落のため、貸借表上の在庫品は、僕の出發のころの（エンゲルスは六月下旬大陸に旅行した）価格でよりも、約二、五〇〇ポンド下がっていると思うなくてはならないのだ（マルクスからのかねに窮しているという手紙の返事）」。<sup>さきに綿花価格は一八六六年の四、五月ごろまでも一四ペンス台に下がってきたこと、そして一八六六年のこのあとはいよいよ一四—一五ペンス台を辿ったことを記しておいたが、一八六七年に入ってから動きを見ると——同じくミドリング・オルレアンズ、一封度当り——一月末一五ペンス $\frac{1}{8}$ から二月末一三ペンス $\frac{7}{8}$ 、四月末一一ペンス $\frac{3}{4}$ 、六月末一二ペンス $\frac{1}{4}$ と漸落傾向をつづけ、そしてさらに七月末は一〇ペンス $\frac{5}{8}$ 、八月末一〇ペンス $\frac{1}{2}$ と低落過程をつづけた。なお綿花価格はその後もひきつづいて下がり、九月末は八ペンス $\frac{3}{4}$ 、十月末は九ペンス、十一月末は七ペンス $\frac{7}{8}$ 、十二月末は七ペンス $\frac{3}{8}$ となっていた</sup>

(Henderson ; op. cit. p. 123)。

一八六八年二月二日付エンゲルスからマルクスへの手紙。「僕はいま、年度末の非常な多忙〔既述のようにエンゲルス商会の営業年度は七月一日から翌年六月三十日までであったから、これはどういう年度末なのかわからない〕やふたたび活気づいてきた商売 (sich wieder belebendes Geschäft) からの多忙のほかに、……とても忙がしい。」

一八六八年二月二十日付エンゲルスからマルクスへの手紙。「急におきた綿花高騰のための用事でおそろしく多忙をきわめていて、朝から夕方の方の七時まで帳場を離れられないし、中食も晩の八時前にとることができないというありさまだ。」

一八六八年三月一日付エンゲルスからマルクスへの手紙。「前週はすっかり朝から晩まで商売であくせくさせられていたので、まったくなにをすることもできなかった。もういまはそれもすぎた——と思うのだが——ので、僕は今週はまたもとに戻るだろう。」

一八六八年三月十日付エンゲルスからマルクスへの手紙。「商売上の嵐 (Sturm in Commerce) がおさまりはじめているので、僕はふたたび晩に仕事にかかっている。……だが、中食をやつと晩の七時半から八時にしか食べられないばあい、ひとは晩に多くのことができないことはわかってくれるだろう。」

一八六八年四月十日付エンゲルスからマルクスへの手紙。「三日間留守にしていた間に〔エンゲルスはマルクスの娘ラウラのラファルグと結婚式のためにロンドンに来ていた〕、リバプールの連中は綿花を三ペンス以上、つまり一〇ペンスから一二ペンスにせり上げた (hat hinaufgeschwindelt)。そのため仕事が多い。」前年一八六七年のおわりごろ月末値が七ペンス台にまで下がったが、一八六八年には二月に急騰が生じ、この四月十日付でいっている一二ペンスという



と一八六七年のはじめごろの高さに戻ったことになる。

一八六八年四月十一日付マルクスからエンゲルスへの手紙。「ラファルグは僕にフランスの金融にかんするホルン(Horn)ともう一冊のパンフレットを送ってくれた。後者はくだらぬものだ。前者は今日君に送ろう」〔HornのパンフレットというのはJ. E. Horn; Frankreichs Finanzlage, Wien, 1868のことであろうか。なお一八六八年十一月十四日付マルクスからエンゲルスへの手紙参照〕。……『クレディ・モビリエの歴史(Histoire du Crédit mobilier)』を通読した。事の本来の真髓については、僕はじっさいすでに数年前に、『トリビュン』にこれについてよりいいものを書いたことがある。著者は業務に通じている。彼自身パリの銀行業者なのだ。だが彼はじっさい、クレディ・モビリエ自身が自行の報告書で提供した公表文書や、取引所相場表に記された事実以外には、なんらの材料ももっていない。秘密の資料はただ裁判のさいにのみ持ち出されうるだろう。僕をなканづく呆れさせたことはつぎのことだ、つまり本来のトリックはすべて取引所における株売買(Agiotage an der Börse)に帰するものであり、そしてこの分野においては根本的に——扮装はいろいろだが——ロー以来あたらしいことはなにもない！ 海峡のこちら側でもあちら側でも。これらの事柄で興味のある点は、実際であって、理論ではない。」

一八六八年四月十七日付エンゲルスからマルクスへの手紙。「株式売買については理論的にはなんら興味のあることもまたあたらしいことも述べえない、ということとはたしかだ。いっさいが、だまかし、ごまかしに帰着するので、やり方以外にはなにも変わりえないのだ。クレディ・モビリエの件の秘密資料は、裁判の手が入らないで進んでいったばあいでも、おそらく帝国崩壊のさいにはおのずから白日のもとにさらけ出されうるし、またさらけ出されるだろう。」クレディ・モビリエが破綻したのはこの前年の一八六七年のことであった。

一八六八年十一月十四日付マルクスからエンゲルスへの手紙。「あらゆる理論よりも実際の方がまさっているので、君が銀行業者等々と関係しているビジネスの方法をごく正確に(例示して)書き送ってくれないか。すなわち、(一)仕入れ(綿花等々の)のさいの方法。事を運ぶばあい金銭的手続きだけについて。手形を振出す時期、等々。(二)販売のさい。君の買い手とのおよび君のロンドンのコルレス先との手形関係。(三)マンチェスターでの君の取引銀行業者との関係および操作(当産勘定等々)。／第二巻は大部分があまりに理論的だから、信用にかんする章を偽瞞(Schwindel)と商業的モラルとを現実に摘発することに利用しようと思う。」この問い合せにたいするエンゲルスの返信は、あったのかなかったのか、ともかく『往復書簡』のなかには収められていない。

一八六八年十二月十一日付エンゲルスからマルクスへの手紙。「当地はきわめてすばらしい恐慌だ(schönste Krisis)。しかもこんどは純粹な(ただ相対的(relativ)にはあるが)過剰生産だ。紡績業者や工場主はほとんど二カ年このかた、当地で売れない商品を自己の損益勘定でインドおよび中国へ委託販売に出し、かくして供給過剰の諸市場の供給過剰を倍化させてきた。いまこれはもうこれ以上やれなくなり、彼らはあちこちで破産している。最初の犠牲者の一人として、わが肥ったノールズ(一八六五年十一月二十日付マルクスからエンゲルスへの手紙参照)が倒れた、——これは委託販売のためというよりはむしろ経営の一般的な弱さのためだが——。すなわち、四人の兄弟がかねをまったく食いつぶしてしまったのだ。／僕が過剰生産を相対的と呼んだのは相変らずまだ高い綿花価格によってやっと過剰生産となっているからだ。二ペンスのちがいがあれば、現存しているいっさいの件を吸収してしまうに十分だったろうし、また十分でもさう( Zwei Pence Unterschied würden und werden hinreichen, den ganzen Kram, der da liegt, zu absorbieren) ミドリリング・オルレアンス綿花は今日一一ペンスだが、戦前は「南北戦争前」時に

よって六ペンス半、七ペンス、八ペンスだった。したがって相変らず旧価格よりも六〇ないし八バ〇ーセント上回っている。この「高い綿花価格によってやっと過剰生産になっている」というのは、製品が値下がりすると原料が高ければあい利潤が消えてコスト割れとなりやすい、ということをしているのであろう。なおこの点、既掲『トリビュン』一八六一年十月十四日号所載の「イギリスの綿花貿易」参照。

一八六八年十二月十五日付マルクスからエンゲルスへの手紙。「マンチエスター等々での木綿破産に堪して僕にガーディアンを送ってもらえないだろうか？」

一八六九年一月十三日付マルクスからエンゲルスへの手紙。「ルーアン、ヴィエンヌ等々でのストライキ（紡績業）。……ルーアン、ヴィエンヌ等々で賃銀引下げをはじめた。そこでストライキだ。われわれは人々にたいして、デュポン（Dupont）〔総務委員会のメンバー〕を通じてもちろん当地の事業人の悪い状態（とくにまた綿業の）について、したがっていまの時期にかねを集める「ストライキの救援資金」ことの困難について、わからせておいた。」

一八六九年一月二十三日付マルクスからエンゲルスへの手紙。「マネー・マーケット・レビュー（Money Market Review）」で見ると、ノールズは一ポンドのうち七シリング六ペンス支払ったようだ。この感心な男はどうしているだろうか？」

一八六九年一月二十八日付マルクスからエンゲルスへの手紙。「ガーニーの件は僕を王者のようにたのしませる。僕はこの件についてはきわめて詳細に調べ上げている。だからグレイト・エドワーズ（great Edwards）を除けば、マンション・ハウス（ロンドン市長の公邸）での議事録のなかにはあたらしいことはなにもなかった。」このあと同年七月三日付の手紙でもガーニー商会について記しているが、このころ同商会の清算の過程がまだつづけられていたので

あろう。

一八六九年四月五日付マルクスからエンゲルスへの手紙。「……またできれば、綿花価格についてあれこれいっているマンチェスターの新聞類も〔送ってほしい〕。マンチェスター出の自由党代議士君はストックポート等々で、労働者たちが直接政府にたいしてインドでの綿花生産やその他の形で保護を要求するように、アジるだろう、ないしアジられるだろう。」

一八六九年四月七日付エンゲルスからマルクスへの手紙。「綿花栽培にたいする国家補助を求めるベイリー (Bayley [John Ellington Bayley]) のアジテーションは、それについて新聞にいくぶん重要な記事が出るほどには当地ではまだあまり公然となっていない。だが近いうちにプレストンのストライキにかんする若干の抜き書きを送ろう。このストライキは、工場の一般的休業をかの地でひきおこす目的で雇い主が直接に扇動しているものだ。彼らはお互いのあいだでショート・タイムないし完全休業にかんして一致しえないので——ある者はその後も操業をつづけようとし、そして他の者はそれに腹を立てるといふうで——、彼らのあいだで共通の行動を打ち立てるための唯一の形式がストライキなのだ。というのは、賃銀引下げの提案にたいしてはどの工場主も反対しないからだ。明らかに二カ年にわたって糸または織物一封度につき一ペンスないし二ペンスの損失を受けながら、しかも休業しようともあるいはショート・タイム操業にしようともしなかったこれらの連中が、いま、一〇パーセントの賃銀引下げを、すなわち一封度について<sup>1/10</sup>ないし<sup>1/6</sup>ペンスの節約を死活問題だと宣言しているとは、まったく最善なことだ！」

一八六九年五月十日付エンゲルスからマルクスへの手紙〔この手紙の年月日はインスティトゥートの推定〕。「当地はきわめてすばらしい産業恐慌となっている (in der schönsten Industriekrisis)。そしてショート・タイムにもか

わらずいぜんとして過度に多く生産されている。工場主たちが持っているところの、ショート・タイムおよび休業にかんして彼ら自身を一致させるための唯一の手段は、労働者のストライキだ。これに向って現在二カ月このかた計画的な努力がなされている。プレストンのそれはその最初の試みだったし、いまそれにつづいて東ランカシアで五パーセントの賃銀引下げが行なわれている。もし労働者がこれを受け入れるなら、あらたな引下げがついで行なわれ、こうしてそれは労働者がストライキに入るまでつづくことになる。というのは、ストライキをさせることだけが問題なのだから。この種のストライキは勇ましいワッツもそのパンフレットのなかでぜんぜん言及していないことだが、それ<sup>と</sup>もとうぜんだろう。」

(7) このワッツのパンフレットとは、マルクスがさきに一八六六年二月十日付の手紙のなかで記している On Machinery, すなわち Trade Societies and Strikes, Machinery and Co-operative Societies, 1865 を指すのである。

一八六九年六月二十二日付エンゲルスからマルクスへの手紙。「当地のストライキはオールド・ハマー (Oldhamer) がふたたび入りこんだ木綿工場では、今朝以来やめになった〔オールド・ハマーというのはなんのことかわからない〕。したがって過剰生産はもはやなんの制限もたない (keine Schranke) ことになったわけだ。」

一八六九年七月三日付マルクスからエンゲルスへの手紙。「オーバレンド・ガーニー商會にたいする有徳なグラッドストーン〔当時首相であった。一八六八―七四年〕および清教徒ブライトの処置を君はどう思う。……ガーニー事件、ないしそれにたいする内閣の態度……は、いまロンドンの労働者間におけるグラッドストーン、ブライトの名前の魔術を打ち破ること大であった。」

一八六九年十一月一日付エンゲルスからマルクスへの手紙。「ボルトンでのこんどの紡績工のストライキ (strikes

der Spinner) にさいして、ある紡績雇い主はサムエル・ムーア (Sam Moore) に卒直につきのようについた。われわれは賃銀の五パーセント引下げはぜんぜん眼中にないのであって、われわれが欲しかつ意図しているのは生産の減少(したがってストライキ)なのだ、と。」

一八六九年十二月九日付エンゲルスからマルクスへの手紙。「中国はしだいに市場を拡大しており、すくなくともしばらくの期間木綿取引をふたたび救済しようとしているかに見える。かの地からの報告は、たくさん委託販売で送られたにもかかわらず、いちじるしくよくなってきたており、以来当地ではふたたび急転換 (Umschlag) が生じ、またもはでにどしどし (flott drauflos) 仕事が行なわれている。もちろんこのことは綿花価格をふたたびつり上げるだろうが、そうなれば利潤はみな輸入業者のふところに入ることになる。だが彼ら〔木綿工場主のことであろう〕はこのところすくなくとも損失なしに操業している。」

一八七〇年七月二十二日付エンゲルスからマルクスへの手紙。「僕は呪われたバニックがいくぶん止んでくれるといいと思う。というのは僕は株 (shares) を売らねばならないのだ。」

一八七〇年八月三日付エンゲルスからマルクスへの手紙。……「僕は少々現金 (cash) が不足しており、公債利子 (Dividenden) を待たねばならない。また払込をしなければならぬから、株式を売らねばならないだろう。君はどう思う、それをもうすこしのばすべきだろうか、それともすぐに手離そうか？僕はまだ損失を受けずに売ることができるのだが。」既述のように、エンゲルスは前年の一八六九年六月末をもって、ゴットフリードと共同経営をしていた商会から身を引いたのであって、ここで「現金が不足している」といっているのは営業上のことからきている話ではない。

一八七〇年八月四日付マルクスからエンゲルスへの手紙。「株式の売却についてだが、僕の意見はこうだ。それはふたたび上がるだろうが、しかしごく近い将来には下がるだろう。というのは、ロンドン株式取引所はずっとこのかた形勢が悪く (Taut)、破産の機会を窺っており、そしてこのことは同様に大陸の取引所にも影響を及ぼしている。だから大量の証券が市場に投げ出されるにちがいない。」

## 九

以上、一八六七年か一八七〇年までの記述を月日を追って見てみた。イギリスの木綿製品は「南北戦争が終るやたちまちのうちに世界市場をふたたび過充に」し、「一八六六年のおわり六カ月中にはほとんど売れなくなった。」そしてインドや中国に「委託販売」がなされたが、このため過充はよりはなはだしくなるばかりだった。かくしてショート・タイムと賃銀引下げ。こうした記述が一八六七年一月から三月の間になされている。だがその後翌一八六八年二月―三月のエンゲルスの手紙には「ふたたび活気づいてきた商売」、「商売上の嵐」という文字が見られ、一八六七年のおわりには月末値が七ペンス台にまで下がった綿花はまた上がり出し、一〇ペンスから一三ペンスにまでなったとされている（これまでにそれによって綿花価格の動きを見てきたヘンダーソンの書の表は一八六七年十二月で終わっている）。だがこの「活気」というのもおそらく商業上の短期のものであったのであろう。――同年十二月十一日付のエンゲルスの手紙では「当地はきわめてすばらしい恐慌だ」とし、紡績業者や工場主は「ほとんど二カ年このかた」インドや中国への委託販売を行なっていたがこれは供給過剰を強めることになり、「いまこれはもうこれ以上やれなくなり、彼らはあちこちで破産している」ことを告げている。

エンゲルスは一八六七年三月十三日付の手紙のなかで「当地の取引はいぜんとして極度に停滞している」として、委託販売、供給過剰、ストライキ、ショート・タイムを挙げ、「もしこれらの事情がすぐに変化しなければ、五月にはきわめてすばらしい過剰生産恐慌がくるだろう」と記していたが、それは一八六七年五月にはまだやってくることはならなかった。だが右の一八六八年十二月の手紙で「当地はきわめてすばらしい恐慌だ」と記しているように、一八六八年末にそれがやってきたわけである。エンゲルスはこの一八六八年末の恐慌について、原料綿花の価格がなお高いことが業者の困難をひきおこす一要因となっていることを注意し、そうした意味で「過剰生産」は「相対的」であるとするともに、「こんどは純粋な……過剰生産だ」と記している。一八六四年秋、一八六五年春のように綿花価格の急落からきたただに商業上のものではない、としているわけであろう。一八六五年春の「綿花恐慌」のさいには、エンゲルスは既掲のようにつぎのように記していたのであった、——「工業自体はあまり影響を受けていない。小さいところは大きいもうだいたいぶ前に破産してしまうか、まったくひそかに消えうせてしまったし、大きいところとはかく注文さえ手に入れば、現在ふたたび若干の利益をえて仕事をすることができる」と。「リバプールではこういわれた、『一八六五年にはスペキュレーターが破滅し、一八六六年には商人が、一八六七年には生産者が破滅した』」(Henderson; op. cit. p. 25)。

エンゲルスはこのように一八六八年末にマンチエスター、ランカシャーにおける「過剰生産恐慌」を告げているが、さらに翌一八六九年五月十日付の手紙でも、「当地はきわめてすばらしい産業恐慌となっている。そしてショート・タイムにもかかわらずいぜんとして過度に多く生産されている」と記している。さきに見たように、『資本論』第一巻のなかでマルクスが「一八六七年三月」の時点でインド、中国市場の供給過剰、賃銀引下げ、ストライキについて



記しているところに、エンゲルスは「これは、すぐつづいて勃発した恐慌の前奏曲であった」という書入れを入れた。エンゲルスはこの一八六八年末から一八六九年の事態を指して「すぐつづいて勃発した恐慌」と記していたのである。すでに一八六六年の後半に世界市場の「過充」が生じ、一八六七年はじめにすでに恐慌の「前奏曲」が現われたのち、約二カ年近くたって「恐慌」となったことになる。これをいいかえればイギリスの木綿工業の不況はこの当時相当な長期にわたったわけである。——「明らかに二カ年にわたって糸または織物一封度につき一ペンスないし二ペンスの損失を受けていた」(前掲、一八六九年四月七日付エンゲルスの手紙)。そしてまた一八六六年五月に生じたロンドンの貨幣市場でのパニックにたいして、木綿工業の過剰生産恐慌は、一八六六年恐慌として概括されるべきものとはいえ、かなりの年月のずれがあったことになる。<sup>(8)</sup>

(8) マルクスは『資本論』第一巻のなかで、イースト・エンドの状態について記している一八六七年四月五日付の新聞を引用するに当って、既掲のように、「一八六六年の恐慌の後陣痛(Nachwehen)について、トリー派の一新聞からの抜き書きを示そう」と記しているが、この「後陣痛」ということを木綿工業の恐慌についてもあてはめるとすれば、これはかならずしも適当ではないであろう、と思われる。マルクスが一八六七年四月の状況を指して「後陣痛」と呼んだのは、第一巻本文を書いたのが一八六七年三月どまりで、その後の事態を観察したうえでなかったことと関係があると見てよいであろう。

エンゲルスは後年『資本論』第三巻を編集したさいいくつかの書入れを入れているが、そのなかでつぎのように記している、「私のよく知っているあるばあいには、一八六八年の恐慌後、破産した一工場主が、自分自身のもとの労働者たちの有給賃労働者となった。すなわちこの工場は、破産後、一つの労働者組合によって継続され、かつての所有者は管理者として雇われたのである」(Bd. II, S. 423, Fußnote 77, 長谷部訳、青木版五五〇ページ)。また、「最近の大きな一般的恐慌以来、一つの転換が生じた。……最近の一八六七年の一般的恐慌以来、大きな諸変化が生じた」(Bd.

III, S. 533—4, Fußnote 8, 訳、六九三ページ。見られるように、エンゲルスはここで「一八六七年の一般的恐慌」と呼んだり、「一八六八年の恐慌」と呼んだりしている。だがまたエンゲルスも「一八六六年の恐慌」と記しているばあいもある(たとえばインスティトゥート版第三卷に「補遺」として付されている「取引所」のなかでは、「蓄積は一八六六年の恐慌以来たえず増大する速さで進行した」と、——Pd. II, S. 543, 訳、六八ページ<sup>(9)</sup>)。恐慌状態がいく年かにわたるようなばあい、恐慌が勃発した年を付して何年の恐慌と呼ぶか、あるいは何年から何年の恐慌と呼んだ方がいいか、一つの問題であるが、エンゲルスがこのように、あるいは一八六六年、あるいは一八六七年、あるいは一八六八年と記しているのは、一八六六年に恐慌が貨幣市場の中心地で勃発したが、産業部面における、とくに木綿工業における困難は、右のように長びき、一八六八—九年に最悪となったという事情によったものであろう。

(9) ちょっとおもしろいのは、エンゲルスが『イギリスにおける労働者階級の状態』を後年再版したさい(イギリス版一八九三年、ドイツ語版一八九二年)、長文の序言を付し、この序言のなかに一八八五年に発表した論文「一八四五年および一八八五年のイギリス」を再録しているが、この再録にあたつて、論文の方では「一八六八年」ないし「一八六八年の恐慌」と書いているところが(大月選集訳、第十七卷、一八六、一八八ページ)、序言の方ではともに「一八六六年」ないし「一八六六年の恐慌」と書ええられていることである(大月選集訳、補巻2、四九九、五〇一ページ、Bücherei des Marxismus-Leninismus, 1952, S. 23, 25)。

「マンチエスター商業会議所はこう述べている、『一八六九年に、取引の極端な悪化から惨禍が生じたが、それは、これに巻き込まれた資産の額からいっても、製造業者のうえにかかってきた窮境と破滅の点からいっても、われわれの商業の歴史においてほとんど比肩するものがないような規模のものであった。この年だけで、破産したこの地方の紡績業者および製造業者は、一般公衆には知られずに債権者と示談にしたような人々を除いても、八〇人以上に達

した。……いくつかの地区での工員の困窮から救貧税がばく大に上げられたし、また操業していない工場への課税負担を避けるために多くの工場の機械が撤去され、また屑鉄として売られさえた』と」(Henderson: op. cit. p. 25)。

なおクラブラムはつぎのように記している、——「一八六六年八月にレート「バンク・レート」は低下しはじめるや、それはつぎの年の七月に二パーセントに達するまで下がりつづけた〔既述のように一八六六年五月十二日に一〇パーセントに上げられたバンク・レートは八月十六日にイングランド銀行条例停止の解除とともに八パーセントに下げられた〕。そしてそこでこの二パーセントが十五カ月間持ちつづけられた。一八六六年の打撃からの商業の回復は緩慢であった。不作がつづいたため、ロンドンでのパンは一八六七年には一八六四年よりもほとんど五〇パーセント高かった。そして一八六八年のなかばまで下がりはじめなかった。高いパンは一八六七—一八八年の国内取引の不振 (sluggish) を意味した。穀物価格が高かったにかかわらず、卸売物価の一般的足どり——穀物を含む——は、一八六六年から一八七〇年まで低下を辿ったが、このことは海外貿易の不活潑を示唆するものである。事実、海外貿易は絶対額は増大したとはいえ、人口一人当りでは変りがなかった。一八六九年には穀物およびパンはふたたび安かった。またアメリカでのすさまじい鉄道建設の一ときがはじまったことは、ブリテンの事業活動が、以前にもしばしばそうであったように、大西洋の風によってふたたび活気を帯びてくるだろうことを示唆した。一八六九—七〇年における割引レート基調が一八六七—一八八年に較べて上がったことは、活気が増大しつつあったことを示している。いろいろの前兆が一八七〇年の急速な成長を示唆していた。ランカシアは一月には繁忙であった。五月には取引の回復は『一般的かつ顕著』であった」(Economic History, vol. II, p. 377-8)。

上掲のようにエンゲルスは一八六九年十二月九日付の手紙において、中国市場で木綿製品の売れゆきがよくなってきたという報告が入ってきたことを告げ、「以来当地ではふたたび急転換が生じ、またもはでにどしどし仕事が行なわれている」と記している。このへんで木綿工業の——そしてまたイギリスの商工業一般の——約三年あまりにわたる不況と恐慌の時期がすぎ、つぎの循環に入っていくたわけである。

なお、つぎの一八七〇年七月二十二日付の手紙でエンゲルスが「呪われたパニック」云々といっているのは、普仏戦争に伴なって取引所でパニックが生じたのである。「一八七〇年七月にフランスとプロシアとの間で戦争が勃発したとき、イングランド銀行は警戒的に五パーセントを出し、八月の両軍最初の衝突のさいには警戒的に六パーセントに引上げた。しかしかかる警戒をもちつづける必要はならなかったので、九月一日に——この日ナポレオン三世がセダンで降伏したのであるが——レートは三パーセントに引下げられた」（Clapham ; Bank of England, vol. II, p. 290）。

おわりに二、三の付言を加えておこう。

南北戦争後アメリカからの綿花供給はふたたびふえてき、「アメリカのヨーロッパにたいする綿花供給は、一八六〇年のピークの数字を通過したのは一八七九年になってからであったとはいえ、しかし一八七一年には一八六一年よりも多くの綿花を送ることができた。一八七〇年にはブリテンの消費の半分以上がふたたびアメリカ綿花であった」（Clapham ; Economic History, vol. II, p. 222）。綿花価格は（ミドリリング・オルレアンズ、一封度当り）、一八六七年のおわりには月末値が七ペンス台まで下がったが、その後また上がり、一八六八年二月三月には一〇ペンスから一三ペンス、そしか一八六八年十二月には一一ペンスとなお戦前より「六〇ないし八〇パーセント上回って」いたことを既

述したが、年平均で見ると、一八六七年一〇ペンス $\frac{7}{8}$ 、一八六八年一〇ペンス $\frac{1}{2}$  (Henderson : *ibid.* p.13) 、そして「ミドリング・アップランド「オルレアンス」綿花は一八七二年の封度当り一〇ペンス $\frac{1}{16}$ から一八七六年の六ペンス $\frac{1}{4}$ まで下落した」と (Clapham : *ibid.* p.228)。クラバムはここでとくに年平均と記していないが、おそらく年平均の数字であろう。これで見ると、一八六八年から一八七二年ごろまでは、すくなくとも年平均では、あまり変りがなかったわけであり、そして六ペンス台、つまり戦前の普通の価格は戻ったのは一八七六年ごろだったことが窺われる。

イギリスの木綿製品の輸出は、量において、織物は一八六七年に、また糸は一八七二年に、それぞれ一八六〇年の数字と同じになった。<sup>10)</sup>

(10) 「反物が一八六〇年の輸出量(二、七七六、二二八千ヤード)に達したのは一八六七年であったが(二、八三二、〇二三千ヤード)、その価額は——一八六〇年の四〇、三四六千ポンドから一八六二年の二八、五六二千ポンドに下がったのち——綿花飢饉の時期を通じてたえず増加をつづけ、一八六六年には五七、九〇三千ポンドであった。糸が一八六〇年の輸出量に達したのは一八七二年であったが、しかし——総価額は一八六〇年の九、八七一千ポンドから一八六二年の六、二〇二千ポンドに減少したといえ——糸の平均価格は一八六〇年の一二ペンスから一八六四年の二八ペンス $\frac{1}{2}$ まで上がった」(Henderson; *ibid.* p.13)。ヘンダーソンがこう記しているのは、価格が大きく変化しているため、輸出価額の動きと量の動きとを区別して観察する必要があることに注意しているのであるが、『資本論』でも「一八四八年以来の連合王国における本来の『工場』の進歩」を示すものとして、木綿工場はじめ各繊維工場製品の「一八四八年、五年、六〇年、六五年の輸出数字を掲げているところ、それぞれと価額とが並記されている。それで見ても、綿糸も、綿織物も一八六〇年にたいし一六五年には量ではいずれも下回っているが、価額ではいずれもすでに上回っている。綿糸は一八六〇年九、八七一千ポンド、一八六五年一〇、三五一千ポンド、また綿い織物は一八六〇年四二、一四二千ポンド(さきの四〇、三四六千ポンドとすこし数字がちがう。包含されている範囲のちがう)、一八六五年四六、九〇四千ポンド (Bd. I, S.436, 長谷部訳、青木版六七七八ページ)。なお、この木綿製品の輸出価額を Bd. I, S. 686 (訳、一〇〇六ページ)に掲げている連合王国の一八六〇年、一八六五年の輸出価額(既出)と比較してみると、

いずれもだいたい総輸出価額の三分の一ほどを占めていたことになる。

「綿花飢饉はたんに、アメリカ南北戦争中における英米関係の一ファクター、イングランドでの窮境の一問題ではなかった。それはランカシアへの綿花供給源を増加させようとする努力を生んだが、そのことはインドおよびエジプトの農業上、産業上の発展にたいして……影響を及ぼした。また綿花飢饉は国内産業に大きな変化をもたらした。

一八六〇年にはランカシアの木綿工業は全能であるかの観を呈していた。だが一八七〇年にはランカシアの木綿工業は、恐慌から抜け出していたしまたある程度その設備をより効率化していたとはいえ、以前には知らなかった競争にすでに広汎に直面しはじめていた」(Henderson, *ibid.*, p. 119)。